東京下町に息づくALWAYSな

銅の「看板建築」

軒のない平坦なマッチ箱のようなお店が連なる東京の下町。その一軒一軒のファサードには、様々な細工を施した銅板などで、お店の個性が演出されていた。これが「看板建築」。かつて東京の町を彩る商店といえば、大半がこのスタイルだった。関東大震災で焼け野原となった悲劇を繰り返さないようにと、火災や地震にも強い銅板が採用された経緯を持つ。その後、東京空襲という悲劇にも生き残り、時の流れと共に、緑青はより鮮やかさを増し、味わいは一層深まっていった。

しかし、近年は消え行く存在となっている。建物自体の老朽化が進んだこと、それをケアする職人が少なくなったこと、区画整理の影響など、理由は様々だ。文化財として保護するほど有名な建築物ではないのかも知れないが、庶民にとってこれこそが自分たちと共に生き、歴史を築いて来た貴重な財産。ALWAYSに心に止めておきたい、そんな銅と街が溶け合った風景を求めて、東京の下町を巡り歩いてみた。

築地　亀屋
上左・上）夜のライトアップでは、細工の妙技がより鮮やかに

宮川食鳥鶏卵（株）
左）これぞ看板建築の代表格といえる堂々たる姿
下）この町とお店の歴史を雄弁に物語る風情あるたたずまい

つきじTASSぎゃらりー若松屋
上）歴史的建築物を少しでも長く存続させたいと、ギャラリーに改装されたそうだ
左）壁もベランダの手摺も当時の銅が見事に活きている
右）新旧の銅板が綺麗に融合その美しさに思わず見とれる

ササヤ
鮮やかな緑青に、思わず立ち止まってしまう

A氏邸・I氏邸・F氏邸
現役の住宅3棟が連なった見事な銅板の壁面

地下鉄・築地駅を上がると、早速、看板建築が…

築地は、威勢がいい魚河岸の町のイメージだが、江戸時代には神戸や長崎の様に貿易を営む外国人のためのお洒落な居留地でもあった。教会や病院、学校など、西洋式の建築が多く存在し、その流れを汲んだモダンなファサードの商店、民家がいまも数多く残されている。

そこだけ、時の流れはゆるやかに…

戦火を逃れ活躍した上野の看板建築は、戦後復興を支えた人々の希望の灯。灯りといえば、戦後初の街路灯は上野商店街だそうだ。その後、都市開発の波に揉まれ、多くの看板建築が消えてしまったが、いまも現役として頑張るその姿を見ると、思わずエールを送りたくなる。

What's? 看板建築とは

江戸の昔、商店は軒を大きく張り出した「出桁造（だしげたづくり）」が主流だった。しかし、関東大震災により焼け野原となった東京では、大幅な区画整理が行われ、各店舗の敷地の何割かが削減されてしまった。この狭くなった土地を有効に使うため、建物を「箱型」に変えた新しい建築様式へと移行していく。そしてこの頃、延焼を防ぐために、銅板を主とした不燃材が大量に建築材料として使用された。中でも、箱型ののっぺりとしたファサードを個性豊かに飾ることができる銅の加工性、独特の風合いなどが特に人気を集めたのである。西洋風のデザインあり、江戸小紋の柄あり、さらに雨樋などにも銅で細工を凝らすなど、当時の職人たちは存分に腕を競いあった。これが人気を博し、やがて全国へと広まっていく。この様式を「看板建築」と命名したのが、前号にも登場された建築家・藤森照信氏である。

比留間歯科医院
左）古き味わいのあるドーマー
中）こんな歯科医院なら
　　子供も怖がらないかも
下）赤いランプが愛らしい

路地裏に息づく、古き良き時代の温もり…

高柳豆腐店
上左）長く伸びたエントツから昇る煙が銅板の風合いとやわらかくマッチしている

中島米穀店
上中）本日は、お休み？ 隣の旅館と共に昭和の息吹を色濃く感じさせてくれる

旧ふぐ料理あおき
上右）隣の建物の名前は、かすれて読むことができなかった

須田商店
毎日使う玄関の戸袋もいまだ現役

F氏邸
戸袋、雨樋などにも職人の技が光る

人形浄瑠璃の小屋、お店、職人が大勢いたことで人形町と呼ばれ始めた。正式に町名となったのは関東大震災以降。いまはお菓子の人形焼きの方が馴染み深い。甘酒横丁など下町情緒漂う路地裏の一角で、古き良き時代の香り漂う看板建築と出会った。